

「働き方イノベーション、開倫塾の先生方はどのようにして授業の腕を磨くのか」

— 日経産業新聞で考える —

開倫塾

塾長 林 明夫

1. おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。
2. 私は、今週は少し忙しい一週間でした。10月22日・月曜日にはマレーシアの首都クアラルンプールに行き、「日本アセアン経営者会議」に出席してきました。日本から20名、アセアン諸国から80名、計約100名が参加し、これからの日本とアセアン・東アジア諸国連合の経済の連携をどうするかということ話し合いました。10月25日・木曜日は福島市で経済同友会の会合がありました。新潟県を含む東北7県のこれからの経済の発展をどうしたらよいかという会議で、私も福島県福島市にある有朋学園、有朋高等学院という学校法人の理事長をやっており、福島経済同友会の会員でもありますので参加させていただきました。さらに、昨日の10月26日・金曜日には開倫塾33周年の記念式典があり、足利高校の校長先生から御祝辞をいただきました。日本で授業が一番上手だといわれる千葉県のラピス鎌ヶ谷という塾の田中先生からは、「どのようにしたら素晴らしい授業ができるのか」というテーマで記念講演をしていただきました。非常に勉強になりました。
3. 今日の「開倫塾の時間」は、10月23日・火曜日の日経産業新聞で開倫塾が大きく特集記事として取り上げられ、「働き方イノベーション、塾の先生方はどのようにして授業の腕を磨くのか」というテーマで掲載されましたので、その内容を少し御紹介させていただきます。これは、会社の中で一人ひとりの力をどのようにつけるのか、また、学校の先生方がどのようにうまく授業を行うのかに関しても参考になるかもしれませんので、御紹介させていただきます。
4. 私は日経産業新聞の記者の方から2時間ほどインタビューを受けました。その記者さんの取材の中で、教育の成果を決定する要因は「塾生(生徒)本人の自覚と先生の力量によって決まる」というお話をさせていただきました。そこで、私達開倫塾が先生方の研修として一番効果的だと考えているのは、授業をする前に先生方同士で授業の内容を披露する「模擬授業」です。ほかの塾や学校でもやっているかもしれませんが、開倫塾では十数名の先生方が集まってお互いの授業を見せ合う「模擬授業」を毎週のように行っています。
5. 「模擬授業」のルールは、15分間の中で1つのテーマを完結することです。例えば、俳句の季語や大化の改新の内容について、どのようにしたら学習塾の講師としての授業ができるのか。立て板に水でスラスラ話せればいいのか、問題点はいろいろあります。ただ、俳句の季語はこうだよ、大化の改新はこうだよと説明すればよいというわけではありません。生徒の表情を見ながら授業ができるかどうか、生徒が内容を理解できているかどうか、理解した内容をどのようにすれば身に付ける、定着することができるか、このようなことを考えて授業をすることが大事なと思います。また、「もう少し生徒とのやり取りをしたほうがよい」、「話し方が高圧的で怖い」などということのないように、生徒への話し方や子どもとの接し方についても研修のメニューに入れたほうがよいと思います。アイコンタクトの仕方、チョークの使い方、黒板の効果的な使い方も大切です。

6. 私は、基本的には小学生・中学生・高校生は勉強ばかりではなく、部活動にもしっかりと取り組むことが大事だと思います。授業中や自宅学習ではガリガリと真剣に勉強するガリ勉という側面も大事かもしれませんが、年代ごとの、また、年相応のコミュニケーションを図ったり体力をつけたりするには部活動が非常に役に立ちますので、部活動にしっかりと取り組むことも必要かと思います。
7. 勉強する場合には、本人の自覚がとても大事です。そこで開倫塾では、塾生の皆様に自覚を持って学習してもらうために、何のために進学するのか、進学して何をするのか、人生の目的は何なのか、生きるとは何などを自分の力で考えるときに参考になる話、ためになる話、「武者語り」も一所懸命やるように先生方をお願いをしています。日経産業新聞でもこの「武者語り」は取り上げてもらいました。大人の一言が子どもの生き方に大きな影響を与えることもあります。ですから、何のために生きるのか・何のために勉強するのかについて、1回の授業で3分間以上のためになるお話を必ずしていただくように先生方をお願いしているのです。「武者語り」をするときにも何を語るかメモを必ず用意する。授業する内容について作り込んだレッシンプランに基づいた授業が地域の学力の向上、地域の教育力の向上に繋がっているということで新聞で紹介されました。何のために学ぶのか、進学するのかという毎回毎回の先生のお話、「武者語り」が塾生の皆様のお役に立つこともあると思います。
8. 先生方は言葉遣いにも気を付けたほうがよいと思います。子どもたちは言葉遣いに非常に敏感です。兄弟姉妹との比較や「絶対受からない」という断定的な表現は、絶対に避けるべきだと思います。褒めることが逆効果になることもあります。例えば、子どもが100点を取った場合に「めずらしく100点を取れたね」と褒めたつもりでも皮肉と思われ、子供たちに失望感をもたせます。ですから、「めずらしく」や「たまたま」という一時的な意味を表す言葉はあまり使わないほうがよいと思います。「いつもよく勉強しているね」や「ほとんどよく出席しているね」など、「いつも」や「ほとんど」という言葉を使ったほうがよいかと思います。
9. 明瞭な声もわかりやすい授業には不可欠です。開倫塾では時々、CRT ラジオ栃木放送のOBの方やアナウンサーの方をお願いしてボイストレーニングをしていただき、非常に役に立っています。
10. 他人への行動や働きかけを表すストロークの概念を理解させることも研修の目的です。時には「叱る」や「注意する」という否定的なストローク、やり取りも大事なかなと思います。しかし、嫌みはなるべく言わないほうがよいと思います。相手の存在や価値を軽くみるような言葉遣いには、注意をすることが必要だなと思います。
11. 今日は、授業を見せ合って講師の研修をするという開倫塾の研修内容が10月23日・火曜日の日経産業新聞で取り上げられましたので、その記事の内容を御紹介させていただきました。「いつも頑張っているね」のように励ましの言葉を使えば使うほど子どもたちは一所懸命勉強するようになりますし、学習の成果も上がると思います。皆様も、ぜひ子どもたちにポジティブな言葉・よい言葉遣いで褒めてあげてくださいね。

— 2013年4月8日 加筆訂正 林 明夫 —